



この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。

この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙には、ご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町三の一九

光文社

神吉晴夫

長編推理小説 火の虚像

昭和39年6月20日 初版発行

検印廃止 ￥280

著者 ささ 笹 ざわ 沢 さ 左 お 保

東京都港区赤坂青山南町6-135
ブルーマンションズ

発行者 神 吉 晴 夫

印刷者 堀 内 文 治 郎

東京都千代田区神田三崎町2
堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽町3 株式会社 光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(明泉堂製本)

表紙の模様・意匠登録 116613

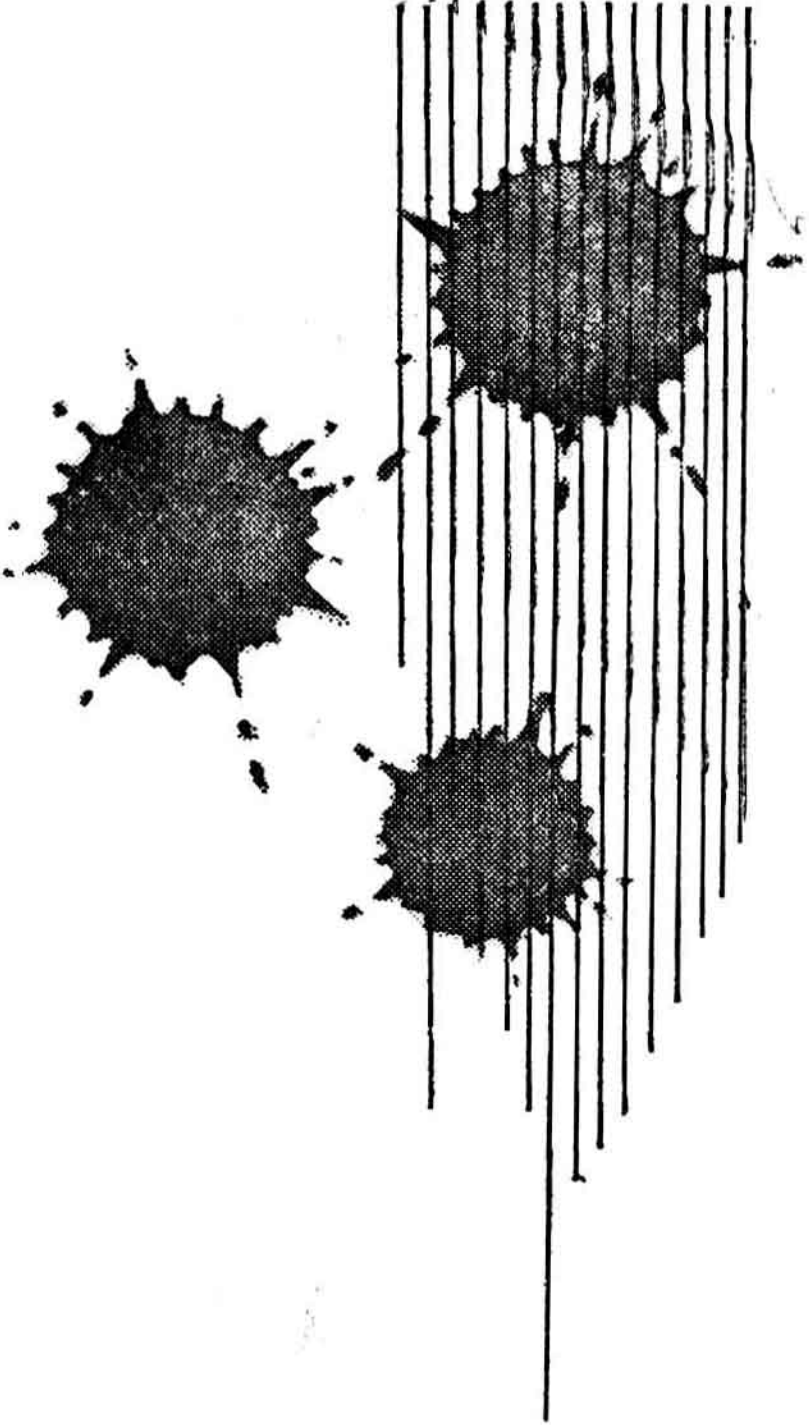
© Sao Sasazawa 1964

^ひ火 ^{きよ}の ^{ぞう}虚像

^{ささ}笹 ^{ざわ}沢 ^さ左 ^お保



カッパ・ノベルス



目次

第一章 破局の朝……………5

第二章 事故死^{プラス}十自殺……………79

第三章 日は落ちた……………145

第四章 限りなき映像……………208

本文のイラスト ケイ・カシワギ

第一章 破局の朝

1

第六スタジオの広さは、約三百平方メートルである。その五分の四は、組み立てられたセットで占められている。残りの空間は、三台のカメラの移動範囲として、いっばいに使われなければならなかった。

けさの大洋^{たいよう}テレビの一階にあるこの第六スタジオは、充満した緊張感によってムンムンするほど熱っぽくなっていた。まばゆいくらいの照明の投射が、なにかむなしい感じであった。

第六スタジオ内には百人近い人間が集まっていたが、私語はほとんど聞かれなかった。時折り、だれかの咳^{せきばら}払いが、はっとするくらいに大きく響くだけである。

スタジオには、四杯のセットが組まれていた。普通のテレビ・ドラマのセットに比較して、段違いに立派な装置であった。

中流家庭の非常に凝った造りの応接室、新しいものと古い設備が入り雑ったようなダイニング・キッチン、三百冊の実物の本を集めたという広い書庫、それに藤棚やアーチ形の本戸のある近代的な庭、それがこの四杯のセットである。

二十八名のタレントたちが顔をそろえて、このセットの中で立ったりすわったりしていた。ほかにテレビの字幕には名前が出ない仕出しの連中が、大学生と女子高校生の扮装のままで数十人も一カ所にかたまっている。

タレントたちはすでに衣装をつけ、メイク・アップもすませていた。中には台本に目を走らせている者もあったが、ほとんどのタレントたちは不安そうにあちこちへ視線を投げかけていた。

このドラマの主役である野末千登勢と、その相手役になる歌舞伎俳優だけは、さすがに腰をすえた椅子から動こうとはしなかった。この二人の周囲には、付人と結髪さんが集まってきていた。結髪さんが絶えず、二人のメイク・アップや髪に手を加えている。付人は、ハンカチで汗をふきとってやったり、魔法ビンのお茶をついだりして、たいへんな気の配りようであった。

人々がこの二人の俳優に神経を使うのは、当然のことであった。二人をこのドラマに出演させる交渉に、大洋テレビとしてはどれほど苦心したかわからなかったのである。野末千登勢は、テレビ初出演の映画スターであった。

最初のうちは、とかくテレビをばかにしがちであった映画俳優たちも、最近になってようやく時勢というものに気づいたらしい。スター級の映画俳優に、交渉があったことを幸いに、続々とテレ

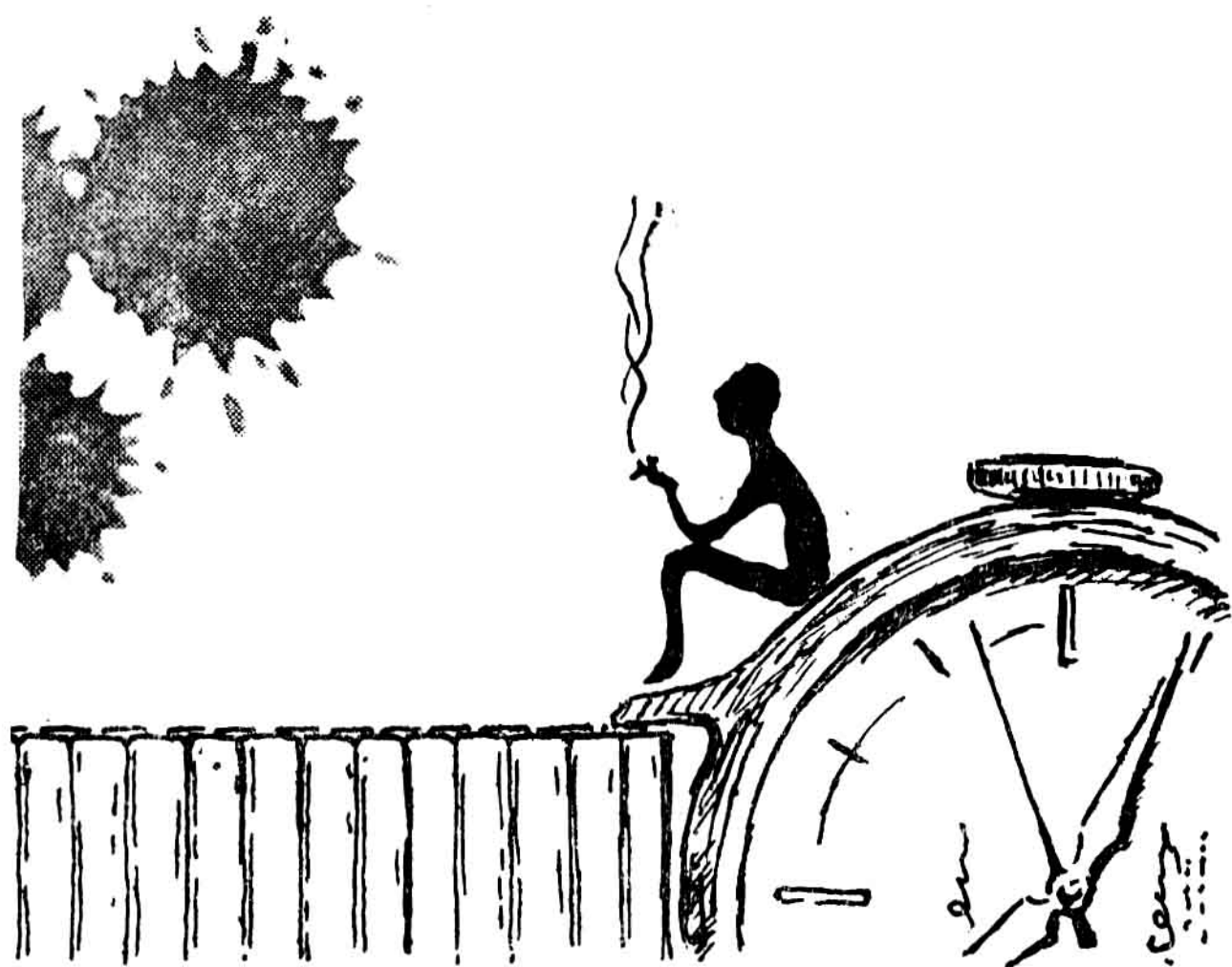
ビに出演するようになった。しかし、この野末千登勢クラスの女優になると、映画会社が簡単にはテレビに貸そうとしない。彼女自身にも、少々時代遅れのプライドがある。

少しでも落ち目になった映画俳優たちが、続々とテレビに転向すればするほど、自分だけはという気になる。だから、野末千登勢がいつ、どこのテレビ局の、どんなドラマに出演するかが関係者やファンたちの一つの興味の対象になっていくくらいである。

野末千登勢の相手役になる歌舞伎俳優にしても、大変な大物であるという点では、ひけをとらなかった。大学教授らしいメイク・アップをしてどっしりと構えている姿は、落ち着いているというよりもむしろ傲慢な態度ごうまんといった感じである。

ガラス張りの仕切り越しにスタジオ全体を見渡せる場所がある。中二階に位置していて、いわばスタジオの心臓部というべきだろう。これを副調整室そうちょうしつといって、ディレクターがあらゆる指示を下し、カメラが捉えた映像とらえたを実際に画面に出す操作が行なわれ、それに加えて効果、音楽、照明、録音のチーフたちが集まっているのである。しかし、そこにいるべき人々も今は残らずスタジオへ降りてきてしまっていた。

キャット・ウォークと呼ばれている、スタジオの天井付近にある狭い足場にも、手のすいた関係者たちが並んでいた。三台のカメラの周囲には、それぞれのカメラ・マンたちが所在なさそうにたたずんでいる。大道具、小道具、持道具の若い男たちもスタジオの中央で、意味もない人垣を作っていた。



こうした人々は言い合わせたように、しきりと時計を気にしていた。まったく、落ち着いてはいられないのである。まだ一分とたっていないとわかっていながら、見たばかりの腕時計に目をやっ
ては吐息する。すでに、本番開始の午前十時を、
二十分も過ぎていた。

もっとも深刻な顔つきでいる連中は、スタジオの入口の扉に背を向けて立っている六人の男女だった。彼らは、それぞれ責任ある立場にいた。ほかの者のように、ただ漠然と不安を感じているだけではすまされないのだ。演出部長の宮内^{みやうち}までが、スタジオへ姿を見せていた。

演出部長が午前十時から、わざわざスタジオまで出掛けてきていることなど、まったく異例だと言わなければならなかった。それだけでも、いかに事態が切迫しているか、如実^{にじつ}に示しているというわけである。たいへんな酒豪でふだんは陽気な



宮内演出部長が、けさは額に皺しわを刻んで、肥満型の体軀たいくを小刻みに揺り動かしていた。

部長の隣りにはテクニカル・ディレクターと進行係が並んで立っていた。フロア・マネージャーもいる。アシスタント・ディレクターの藤城ふじしろが、自分の責任であるかのようにうつ向むかいていた。

プロデュース・ディレクターの加古川洋介かこがわようすけを助けて、このドラマにかぎり特別につけられた演出部の瀬戸秋路せとあきじが、宮内部長と向かい合いに立っている。瀬戸秋路がこの六人の中でも、目立って緊張しているようだった。心持ち顔色が青く、瞬きまたたが早いのも焦燥感しょうそうかんのせいだろうか。

「困った……」

時計をながめたまま宮内部長が、重苦しくため息をついた。部長に倣ならったように、あとの五人もいっせいに時計へ目を落とした。

「あのう……」

と、右足の貧乏ゆすりをとめて瀬戸秋路が顔をあげた。

「本番の時間を、変更することはできないでしょうか？」

彼女は部長の顔色を窺いながら、思いきったようにそう言った。

「冗談じゃない。そんなことはとても不可能だよ、瀬戸君……」

部長は顔をしかめて、言葉を唾のように吐き出した。

「普通のドラマならともかく、この『女二代』の本番を、延期するようなことは、絶対にできないね」

「でも、生放送ではありませんから、番組に穴があくという最悪の事態にはならないでしょう。ビデオの本番を、あすということにしたら……」

瀬戸秋路の頬が、わずかに紅潮した。美人ではなし、どことなく男っぽい顔立ちの彼女だが、色は白く滑らかな皮膚をしていた。独身で所帯やつれしていないせいか、三十一という実際の年よりは三つ四つ若く見えた。

瀬戸秋路の言うとおり、芸術祭参加ドラマ『女二代』の本番を延期しても、確かに放送自体には影響しなかった。生放送ではないから、テレビの番組に支障をきたさないわけである。放送予定日は十一月五日、夜八時から一時間の山川電機提供『山川火曜劇場』であった。きょうは十月二十二日だから、まだ二週間の余裕がある。

「瀬戸君。きみも演出部は長いんだし、このドラマ制作に関する経緯もじゅうぶん承知しているは

ずじゃないか。なぜ急に、女流ディレクターとして将来を嘱望しよくぼうされているきみが、そんな素人しろうとっぽいことを言い出すんだろうね。きみもわれわれ同様に、少し逆上気味なんだよ」

演出部長は、慨嘆するようにスタジオの高い天井を仰いだ。彼が嘆くのもむりはないのである。

瀬戸秋路の提案は事実、ばかげたことだったのだ。実際にそんなことが、通用するはずはなかった。「大洋テレビとしては、五本の芸術祭参加番組を制作する。しかし、その中でもこのドラマがもっとも大物であることは、きみ自身がいちばんよく知っているはずなんだがね」

「はあ……」

沈痛な響きさえ感じられる演出部長の言葉に、瀬戸秋路も思わず顔を伏せてしまっていた。

「編成局長からも、今年の芸術祭はドラマ『女二代』に総力を結集するよう指示があった。スポンサーの山川電機が、金に糸目はつけないというほどの力の入れようなんですね。きみも承知しているように、そのために大洋テレビ開局以来、前例のない予算、期間、キャスト人員を組んだんじゃないか」

「わかっています」

「まず問題なのは、主役の二人だよ。特に野末千登勢は、きょうの夜九時までには、どうしても返さなければならぬ。撮影の関係で三十分の狂いも困るという映画会社からの厳命なんだ。それに、このスタジオを『女二代』で使用できるのは、きょう一日だけじゃないか。本番延期なんて、狂気のさただよ」

「でも、こうなったら延期するほかはないと思います」

「責任問題に発展するよ。そんなことをしたら……」

「わたくしは、覚悟してますけど……」

「きみじゃないよ。責任をとらされるのは、ぼくだ。まったく困ったことをしてくれるね、加古川君も……」

宮内部長は、白くなるほど唇をかんだ。もともと血色のいい部長の顔がいつそう赤く染まった。宮内部長の言うことは妥当であった。今になって本番を延期することなど、できるはずはなかったのだ。V・T・Rつまりビデオ・テープ・レコーダー（磁気テープ録画）だから、確かに放送日には影響しない。だが、本番の条件は、その場になって変更することは不可能なようにできているのである。

まず、タレントの問題がある。特にたいへんなのは、主役を演ずる映画女優であった。野末千登勢が契約している映画会社では、原則として彼女のテレビ出演を認めていない。今までに再三、各テレビ局から話を持ちこんだのだが、いずれも相手にされなかった。しかし、今回のドラマで、大衆テレビが見事に野末千登勢出演の交渉に成功したのである。これだけでも、テレビ界では大きな話題になった。

野末千登勢が出演することに決まった理由として、次のような点があげられている。まず、契約している映画会社と大衆テレビが同じ資本系統であったこと。次に『女二代』の脚本を書きおろし

た作家のドラマに、野末千登勢が前々から出演したいと希望していて、彼女自身ひじょうに乗り気であったこと。そのほか、出演料も思いきって出すことになったし、彼女を拘束するのは一日だけだということ。映画会社をしぶながら承知させたのである。したがって、どんなことがあっても野末千登勢を使えるのはきょうの夜九時までであった。なにしろ、野末千登勢が主演女優なのだから、このことだけでも、本番をあす以降に延期することは、とうてい、むりだというわけなのである。

仕出しの連中はともかく、二十八人のタレントたちにもきょうを棒にふって改めて時間をあけさせるには、多くの支障があるのだ。二十八人のうちで、たいして仕事を持っていないというクラスの者はほんの十人たらずであった。あとのタレントたちは、それぞれ仕事のスケジュールに縛^{しば}られているのだ。きょうの本番を終えしだい、ほかのテレビ局へ駆けつけるなり、映画の撮影所へ直行するなり、また飛行機で大阪へ飛ぶなり、という予定のタレントが何人もいる。

本番を延期すれば、もう一度同じ顔ぶれでというわけにはいかなくなる。出演料だけは払ったうえで、最初から配役をし直さなければならぬわけだった。

この第六スタジオの使用予定は、一カ月間ぎっしりと詰まっている。一時間でも、遊ばせておく余裕はないのだ。本番延期ということになれば、ひとまずこの四杯のセットを取りこわしてしまわなければならない。普通のドラマの二倍以上も、費用をかけた豪華なセットなのである。取りこわしてしまったら、制作費の大きな損失になるし、いつどこに、ふたたびセットを組むことができる

のか、その予想すらつかないのであった。いずれにしても、本番延期は許されない。予定どおり、午前十時から午後九時までの時間内に本番を撮り終えなければならぬのだ。

「だめです」

と、演出部次長の森中^{もりなか}が、扉の隙間^{すきま}から身体^{からだ}を滑りこませるようにして、スタジオの中にはいつてきた。

「昨夜来、自宅へもいまだになんの連絡もないそうです。奥さんもおろおろしていましたよ」

次長の森中は、肩で息をしながら宮内部長にそう報告した。森中の白い額には青く血管が浮き出ていて、汗が粒となって光っていた。

「諦める^{あきら}ほかはなさそうだな」

宮内部長は、投げやりに言った。

「でも、いったいどこへ行ってしまったんでしょうか」

瀬戸秋路が薄い胸の上で腕を組んだ。

「そんなことはわかるもんか。奥さんも心配かもしれないが、こっちは、心配以上だぜ、まったく……」

森中はそんな乱暴な言い方をして、床を這^はっているカメラのコードをけとばした。

「でも、加古川さんは特に仕事にはきびしい人だし、昨夜^{ゆうべ}も夜中の二時にリハーサルが終わったとき、あすの本番は時間厳守、夜ふかしは絶対に禁物だって、みんなを集めて一席ぶったくらいなん

です。そのご当人が、行方不明ゆくえになってしまって、本番に顔を見せないなんて、どう考えても不思議ですわ」

「瀬戸君は、加古川がどうしたんだと言いたいんだ？」

「思いつきなんですけど、事故でもあったんじゃないでしょうか」

「交通事故かね？」

「ええ」

「そうだったら当然、自宅へ連絡があるはずだよ。加古川は昨夜から、家へも帰っていないんじゃないか。本人も帰って来なければ、どこからの連絡もない」

「はあ……」

「だいたい、気持がたるんでいる証拠だよ。どんな事情があろうと、弁解だけではすまされない。本番に間に合わないようなディレクターは、無条件で失格だ。スポンサーから演出は加古川洋介で、というご指名があったんで、すっかり甘えてしまっているんじゃないかな。加古川のやつ、今年の四月にジャーナリスト大賞を受賞してから、だいぶん天狗てんぐになっているんだ」

「だからって、本番に遅れて来るような加古川さんではないと思います」

「瀬戸君は、ひどく加古川の肩を持つじゃないか」

「加古川さんの仕事ぶりに関しては、わたくし尊敬しています」

「尊敬？ よしたまえ。そういう芸術づいた甘い気持は、テレビのディレクターには通用しないん